

## 二十世紀最後の講演、同窓会、徹夜、そして文化祭

高部英明

### (天文学会・特別講演)

10月5日(木) - 7日(土)、群馬県伊勢崎町の群馬総合教育センターという立派な施設で、日本天文学会の秋季年会が開催され、出席した(後ろから2ページ目のプログラム参照)。私は全セッション終了後の7日、3時から40分間の特別講演を行った(最後のページが講演のアウトライン)。講演題目は「高強度レーザーを用いた実験室天体物理」である。学会出席者は累計400人程度(発表件数431)。家路を急ぎながらも、百人程の聴衆が残ってくれた。

前日の懇親会で、来賓の群馬県知事の挨拶に「伝統ある日本天文学会の20世紀最後の年会を群馬県で開催していただき、大変光栄に存じます」など、「20世紀最後」という言葉が何度か聞かれた。そこで、私も「権威ある天文学会の20世紀最後の講演をさせていただくことを大変光栄に存じ上げると共に、今から紹介する内容が21世紀の天文学会の新たな展開に絡んでくることを願いつつ講演をさせていただきます」という、前口上で講演を始めた。

会場は400人収容の立派な講堂。広いステージの上で、気持よく講演をすることが出来た。質問時間を十分とるために、3分過ぎに講演を終了。最後のOHPは筆書きの「天地人」。「会場の皆さんが研究されているのは『天』の宇宙物理、これに対し、我々が進めようとしているのは『地』の宇宙物理。これを繋ぐのは両研究者の『人の和』である。従って、この新しい天体物理の成否の鍵は『天地人』である」と結んだ。

質問があった。最初は地球内部の状態方程式に関連して、次は電子・陽電子プラズマの性能向上と強磁場との相互作用に関連して。3番目は難しい質問であった。「貴方が提案しているこのような研究を、貴方の所属母体である『核融合・プラズマ』の研究者はどの程度認知しているのですか?」。この質問に対し正直に答えた。「核融合研究者の間に基礎学術に貢献しつつ核融合プロジェクトを推進して行くべきだ、との認識は多数を占めつつある。所が、それがレーザーによる宇宙物理である、と考えている人はまだ少数派である。レーザーの場合、レーザーの性能向上が極限物理への挑戦を可能にしてくれ、比較的、基礎研究との共存を図りつつ核融合研究を推進するのは容易である。しかし、多数派の磁場核融合の研究者がそのような認識に至るのは、大変難しいのではないかと思う。全体としての新しい方向性は、今後の議論で明らかとなっていくだろう」。この答えには、後で質問者の柴田君(京大)に「高部さん。えらく慎重な答えでしたね」と冷やかされた。

講演の後、寿岳(じゅがく)先生(東海大)と蜂巢さん(東大)が壇上に上がってきた。寿岳先生は「パスツール型の研究の進め方は良かった。知らなかったよ」と。そのあと、「所で、レーザー実験やるのいくら掛かるんだ。維持費などの年間予算を実験数(ショット数)で割るといくらなの?」と、質問され「年間予算が10億弱。年600ショットぐらいですから、1ショット200万円くらい? でも、建設費200億も入れるともっと高くなりますね」と答えた。「うん、うん、そうだろうね」と納得されたようだ。

実は、寿岳先生は丸善の科学月刊誌「パリティ」の編集委員だったこともあり、前日、挨拶をした。すると「いやー、君の話があると知り、土曜は早々帰るつもりだったが、遅らせることにしたんだ」と言って下さった。そこで、「もし先生が私の講演を面白いと思われたら、パリティに

書かせてください」とおねがいしたところ、快諾して下さった。

講演の後、待っていてくれた柴田、松元（千葉大）、吉田（茨城大）の4人でタクシーにてJR伊勢崎駅へ向かい、高崎から新幹線で東京駅に6時半頃着いた。

### （天文学会出席から）

さて、初日（5日）からの話を書こう。大阪を2時頃出て伊勢崎駅の裏手にあるステーション・ホテルに着いたのは7時頃であった。偶然、国立天文台の渡邊さん（太陽観測）と一緒にになり、二人で夕食に出かけた。この町に食べるところがあるのか、と思わせるような田舎町である。かなり南の方に歩いて「北海亭」という居酒屋で食事をする。彼は「ようこう」の次期太陽観測衛星「SOLAR-B」の開発に携わっており、2月の宇宙研のMVロケット墜落後の最新情報を教えてくれた。予定されていた全ての衛星の打ち上げは半年延期。SOLAR-Bの場合は1年延期。これは、2月に墜落したX線観測衛星「ASTRO-E」が天文学会の支援もあり復活し、2004年に「ASTRO-E2」として打ち上げられることになり、さらに半年繰り延べされたことによる。

ともあれ、ASTRO-Eの関係者はホッと胸をなで下ろしていることであろう。設計変更はせず、全く同じものを作るとのこと。結果、前回の制作費が130億円だったのが100億ですむとのこと。すでに来年度の概算要求が文部省から大蔵に提出されている。

彼と話していたら、核融合研のT氏と高校から同級生と分かった。「じゃ、学年は僕と同じじゃない」と。子どもの進学のことなど話し、かなり飲んだ後、ホテルに戻った。

6日の朝は「突発天体・突発現象」の企画セッションに出た。反復新星、X線ランジット、矮新星、激変星などの言葉が踊る。鈴木君（東大野本研）の学生がSN1987Aのリング衝突を3次元でかなり大規模と思われる計算をしていた。4月に上智の伊藤先生の助手で赴任した和南城（わなじょう：野本研出身）君の話も聞いた。最後に、この企画セッションの今後について議論があった。物理学会でも企画セッションを考えても良いのではないかと、思った（私は9月から物理学会の核融合・プラズマ・放電の領域代表をさせられており、学会のあり方を考える立場にある）。

昼食時、鈴木君と村上さん（核融合研）が食事を終えた机にジョインした。「ご結婚おめでとう。ほんとと驚いちゃったよ」と、改めて祝福した。

午後は「恒星」のセッション。蜂巢さん（東大）の二重星のアクリーションを含む3次元シミュレーションは圧巻であった。彼、衰えず、意気盛なりである。東大の佐藤研の長滝君はユニークな人物だ。質問の前に、必ず相手をほめて質問する。発表の内容は、自分が抱いた疑問を、自分なりに解決していく。その過程を淡々と述べる、と言うものであった。ヒョウヒョウたる雰囲気はよろしいが、共同研究のスタイルも学んだ方が良さそうだ。

4時から総会が講堂で開催された。若い人が沢山参加しているのに驚いた。議案書を見ると理事長と2人の副理事長を除いて、他の理事は私の良く知る若い（私より）人達が候補として挙げられている。また、彼らが会計や、出版、年会などの実行委員長となっている。この点について、後で蜂巢氏に質問した。「20年前頃から、若手起用に変わりました。若い人がやるから、ドン・ドン新しい企画が実施され、学会の活性化に大いに貢献しています」との事であった。天文学会では理事が名誉職の時代はとうの昔に終わった、と。どこかの学会には耳の痛い話である。

今回、研究奨励賞を受賞した高橋順子さん（国立天文台天文学データ解析計算センター研究員）の受賞講演があった。「星間分子と星間塵表面反応についての理論的研究（宇宙に於ける水素分子形成過程の解明）」。MD（分子動力学）によるシミュレーションで、宇宙塵を媒体に水素原子が吸着し、拡散等を通して分子を形成し、塵から離脱して宇宙空間に飛び立つまでを4段階の物理に分類し、それぞれの過程を詳細に研究、そして、結果の実験との対応で理論の正しさを証明した。面白いのはこの様にして生まれた水素分子は振動の量子状態が14準位ある内の7準位当たりによく分布することだ。つまり、反転分布した分子が自然に出来る。従って、宇宙の暗闇から、水素分子誕生の証である赤外の光が観測されるはずだ、と彼女は力説していた。

彼女は京大の化学出身で、博士取得後、福井謙一先生が作った「基礎化学研究所」で先生の薫陶を受けた。彼女を中心とした6編ほどの一連の論文が今回の受賞に繋がった。講演の内容は大変分かり易く、時間を大幅に超過して（意に介することない風に、堂々と時間超過していた）、「宇宙での分子形成から生命の誕生まで、研究を発展させたい」と、大風呂敷で締めくくった。彼女には一枚OHP（AUに関するもの）をもらい、翌日の講演で使わせていただいた。

### （東京での関東同窓会）

7日の話しに戻ろう。特別講演を終え、JRで高崎経由で新幹線で東京へ。東京駅に着いた。丸の内側に出て、同窓会（第23回中津南高校関東同窓会）の会場がある二重橋駅の近くまで歩いた。東京会館12階のロイヤルルームで、第1部がジャーナリストの櫻井よしこ氏の講演で、第2部が総会と懇親会という立派なもの。私が着いたらちょうど総会が始まる前だった。入り口で櫻井さんが自著の本にサインをして購入者に渡していた。私も「憲法とはなにか」なる本を、同級生の麻生恵美子さんが「お礼に」と、買ってくれた。実は、彼女の大学生の娘がレーザー研を見学したいというので、娘とその友人を案内したことがあり、そのお礼だ。「はい、勉強します」と、受け取った。

今回は私の同期が幹事を務めたことから、彼女から参加の誘いがあった。出張と運良く重なり出席したというわけだ。いるいる、なつかしい連中が。参加者は200人はいようか。私は何もしていないのに幹事席に座らされ、総会の進行を眺めた。きちっとしてるのには感心した。母校の校長や同窓会長まで九州から出てこられ、来賓挨拶をしていた。今回の幹事のリーダーは久恒君。今は、新橋で弁護士事務所を構えている。ずいぶん以前から丁寧な暑中見舞いと年賀状を毎年頂いている。女房と「離婚するときは彼に頼もう」とハガキを見て話したことがある。

同期が二人、九州からわざわざ出てきて、獅子舞を披露していたのには驚いた。横に座ったIさんと「人間について」みたいな会話を長々とした記憶がある。余り食べる暇もなく、午後の講演の興奮もあってか、また、久しぶりに同期に会った喜びもあってか、すぐビールに酔ってしまったようだ。会の最後に30年ぶりに校歌を歌わされた。不思議なもので、歌い始めるとすぐメロディーを思い出した。

最後に、同じ教育者ということもあり、校長先生に挨拶した。名刺を渡すと「実は、私の息子は東大の博士課程の学生で、宇宙線研の荒船先生の所で素粒子の研究をしています」と話された。荒船先生は有名なので私も名前は存じ上げている。来年退官とのこと。息子さんは神戸大学の先生と共同研究をされていて、よく神戸には出かけているとのことであった。たぶん、谷川先生の関係かなー、などと勝手に解釈した。

会が終わったのは8時過ぎ。同期の20人ほどで2次会のため日本橋にタクシーで出かけた。言われるままに、着いたところは炉端風の店。東京の幹事達は総会のために毎月、集まっては議論

を重ね、その後、決まったように此の店に来て懇親を深めてきたとのこと。高校時代はクラスが別で話したこともなかった連中が、意気投合しているのには感心した。同窓会というものはこんなものなのでしょうし、そこが同窓会の良いところでしょう。私も若い頃は「同窓会。なにそれ」という感じが強かったが、年を経るほどにだんだん同窓会がとても楽しく思えるようになってきた。

2次会では小学校からの友達のNさんと同席で、昔の話などをした。途中、中座してその夜泊まる予定のホテルに電話した。「10時頃チェック・インすると言いましたが、遅れそうで、12時頃になりそうです。よろしいですか？」と。2次会が終わったのは10時過ぎ？ どういう訳か、気が付いたら「カラオケ」で歌っていた。3次会のような。歌ったのは一曲で、石原裕次郎と誰かのデュエット。これをMさんと一緒に歌った（様な気がする）。

3次会が終わり時計を見たら12時過ぎ。タクシーで帰る人も居たが、横浜のI君が「帰れない、これから新宿の知ってるカラオケ店に行って朝まで歌う」と言うので、私は旅の荷物（キャリアー）を引きつつ、タクシーに乗り新宿まで出かけた。悪い奴等で、新宿に住んでいる同級生二人（2次会の後、帰宅していた）を電話で呼び出し、付き合わせた。総勢10人。九州から出てきた二人も、当然、メンバーだ。ここで、朝の5時まで歌いまくった。当然、私も。何を歌ったか？「22才の別れ」、「木綿のハンカチーフ」、「昴（すばる）」、松山千春の何とか、などなど。実は、学生時代の歌か石原裕次郎の歌ぐらいしか知らないのだ。

おかしなものでM君（東大出だ）は「赤城の子守歌」や「ひばりの～の歌」系統の古い、古い歌ばかり。彼は「おれ、今日は結婚式に出なきゃいけないんだけどなー」と言いながらの参加であった。家が柏では帰れない。I君は音痴なくせに、私のお株を奪って何度も石原裕次郎していた。やはり、一番上手は九州から出てきたM君。サングラスかけて歌う尾崎豊の歌は、その振り付けまで含め最高でした。最後には壁を蹴ったり、飛び跳ねたり（幸い、こんな夜中にバカ騒ぎをしていたアホは私たちだけで、他のお客の迷惑にはならなかった）で、そのままライブのステージだった。

朝、5時となり閉店。一人4千円ずつ（ホテルより安いな！？）。皆と別れ私はJRで東京駅に向かった。今日は高2の息子の文化祭で、一ヶ月掛かって作り上げたタージ・マハールを家族で見に行く約束だった。高校が京都駅前東寺（五重塔の）の敷地内にあるので、京都駅で待ち合わせることにしていた。日曜だし、始発のひかり（6:12発）でゆっくり寝て帰ろうと思っていたら、何と、7時台まで指定席は満席だ。うんんー、と考へて、6時発の500系の弾丸特急「のぞみ1号」に空席があったので、それで帰ることにした。不足分1400円ほどを2千円札で払ったが、それでも、端の席はなく3人席のまん中の席であった。

### （息子の文化祭）

結局、眠れもせず、8時過ぎに京都に着いた。これでは、文化祭には早すぎるし、眠たくもある。家に電話して、一旦、帰宅することにした。JR富田駅に着き、「アホみたい」とあきれながらも迎えに来てくれた女房の車で帰宅。30分もしない内に女房と娘とその友人を車で駅まで送り、その後、寝た。2時間ほど。そして、昼過ぎには私も文化祭に合流し、息子の汗と涙の結晶を見た。この一ヶ月間、息子の帰宅は11時頃が続いた。最後には（私が天文学会出席中）級友3人とタクシーで、夜中の3時過ぎに帰宅。友人も泊め（彼らの家はもっと遠いため）、6時過ぎには出かけていったとのこと。「そこまではかー？」と思うが、これも教育の一環のようだ。ちゃんと、先生の指示でそのようにしたとのこと。

息子のクラス（2年12組）は「アジアを巡る」というタイトルで、教室に入ったところが万里の長城。秦の時代に作られた古い壁は牛乳パックを重ねてつくり、明の時代の新しい部分はベニアを使っていた。前に立った生徒が説明をしてくれる。5メートルほど歩くと暗幕の中。ここは明の時代に改修した長城の内部で、武器庫として使っていた、というような説明。この子の声はなかなかよく通っていて聞き易かった、が、内容が難しく大学の先生もフォローできず。

そこを抜けると、雲崗（うんこう）の大石仏。女房のアイデアで使うことになった紙粘土（これ、女房の趣味。わが家には芸術作品なるものがゴロゴロしている）の光沢と古さを出すための生徒の工夫がうまく、とても良くできていた。説明に、「この石仏の大きさは足元にあります人間（粘土細工）と比べると良く分かります」と、なかなかの演出。次は、チベットのラマ教寺院。「Seven Years in Tibet」の映画を参考にして作りました、という作品は大変手の込んだもので、大きな段ボールに寺院の窓を沢山沢山切り抜きその上に窓屋根をはり...、と聞いてて、つい「ご苦労さん。期間はどれくらい掛かったの」と聞いてしまった。「二人で、一ヶ月かけて作りました」とのことでした。

さて、最後の部屋が「タージ・マハール」。周りから「オオー」という声が漏れる。すばらしい（親バカだ）。紙粘土の柔らかい光沢が、雰囲気をかもし出している。説明によると「建物の前の水面にタージ・マハールが映って見え、これが大変綺麗なのです」と。確かに、水が張られ、映って見える。後で息子から聞いた話だが、前日（文化祭は二日間ある）は水漏れがひどく、結局、表面にサランラップを張って水面代わりにしたとのこと。さて、このタージ・マハールの部屋には説明者と、出口のドアを開け「ありがとうございました」という役の二人の生徒がいる。息子は後者。「ご苦労さん」と出る時に声をかけたら、脇腹をこぶかれた。後で聞いたが、息子がリーダーで皆の役を決め、自分は説明役が嫌で、一日中、ドアを開けていたとのこと。企画した内容が少し真面目過ぎたようで「女子高生が余り来てくれなかった」と、ボソッと言っていた。

運動場ではライブ・コンサートをやっている。模擬店も沢山出ている。息子のクラスの出し物は「櫛かつ」。二本で200円。行くと、他の模擬店は長蛇の列なのに、「櫛かつ」だけ列んでいない。大きな張りぼての「櫛かつ」を持った生徒がしきりに券を売っている。「売れてないのかなー」と心配した。ところが、千本用意した「櫛かつ」は完売したとのこと。すばらしい。女房はお母さん連中と話しの最中。私は娘とその友人をつれて帰路に着いた。

当然、この日は早くから床につき、「爆縮」ならぬ「爆睡」をした。なんとも充実した(?) 2日間であったことか。書き終えてみれば、表題から大きくずれた原稿となってしまった。でも、考えれば「二十世紀最後の講演のあとの、二十世紀最後の同窓会、二十世紀最後の徹夜、二十世紀最後の文化祭」と「二十世紀最後」づくしの楽しい2日間であった。

そうだ、東京のホテルは結局行かずじまい。予約の時、電話番号を伝えているので、請求が来るのを覚悟していたのに、一週間経った今も連絡はない。どうなるだろう？